

第4章 青少年の効力感、時間的展望と逸脱行為、犯罪被害および被害不安について

青少年のやる気を規定する重要な要因として、本章では効力感と時間的展望についてとりあげる。将来自分の希望する仕事につけると思っているかどうかなど、将来成功することへの期待（自信）としての効力感は、そうした成功をもたらすために今は一生懸命がんばろう、といった形で現在のやる気を規定すると考えられる。またそうした効力感を持てれば、将来希望する仕事に必要な勉強を現在行うなど、将来への計画にもとづいて現在の行動を考えることになる。一方、効力感を持てなければ、将来のことを考えても無駄であるから、現在の行動はより刹那主義的なものとなる。時間的展望という概念を用いれば、前者では時間的展望をもっており、後者では時間的展望がないということになる。今の論述に従えば、効力感があれば時間的展望を持ち得るが、効力感がなければ、時間的展望も持ち得ないということになる。こうした将来への時間的展望、あるいは目標が明確であるかどうかはやはり現在のやる気を考える上で重要な要因となる。

本章では、こうした観点から青少年の効力感、時間的展望のありようを調査し、またそれらと逸脱行為、犯罪被害経験や被害への不安などとの関連について検討する。

1. 将来の成功に関する効力感

青少年は将来の成功についてどの程度肯定的に考えているのであろうか。

本調査では、将来の成功事態について過去の調査研究（総務庁青少年対策本部による『青少年の学歴観と非行に関する研究調査』）等を参考にして、成功事態として10の事態を想定し、そのそれぞれについて「あなたがいっしょうけんめいがんばれば、どのくらいできると思えますか」という問いを設定し、「必ずできる」「たぶんできる」「どちらともいえない」「たぶんできない」「絶対できない」の5段階の選択肢から一つを選択させる形式で効力感に関する回答を求めた。

設定した成功事態は、「学校でよい成績をとる（以下成績）」、「希望する学校に進学する（以下進学）」といった学業達成に関するもの、「希望する職業につく（以下職業）」、「大きな会社に勤める（以下大会社）」、「タレントになる（以下タレント）」などの職業達成に関するもの、「しあわせな結婚をする（以下結婚）」、「よい親になる（以下よい親）」、「人から尊敬される人間になる（以下尊敬される）」といった対人関係、親和的

領域に関するもの、および「お金持ちになる（以下金持ち）」、「社会的に高い地位につく（社会的地位）」というものからなる。

各事態に対する「必ずできる」から「絶対できない」までの5段階の回答に対し、それぞれ5～1点を与えた。

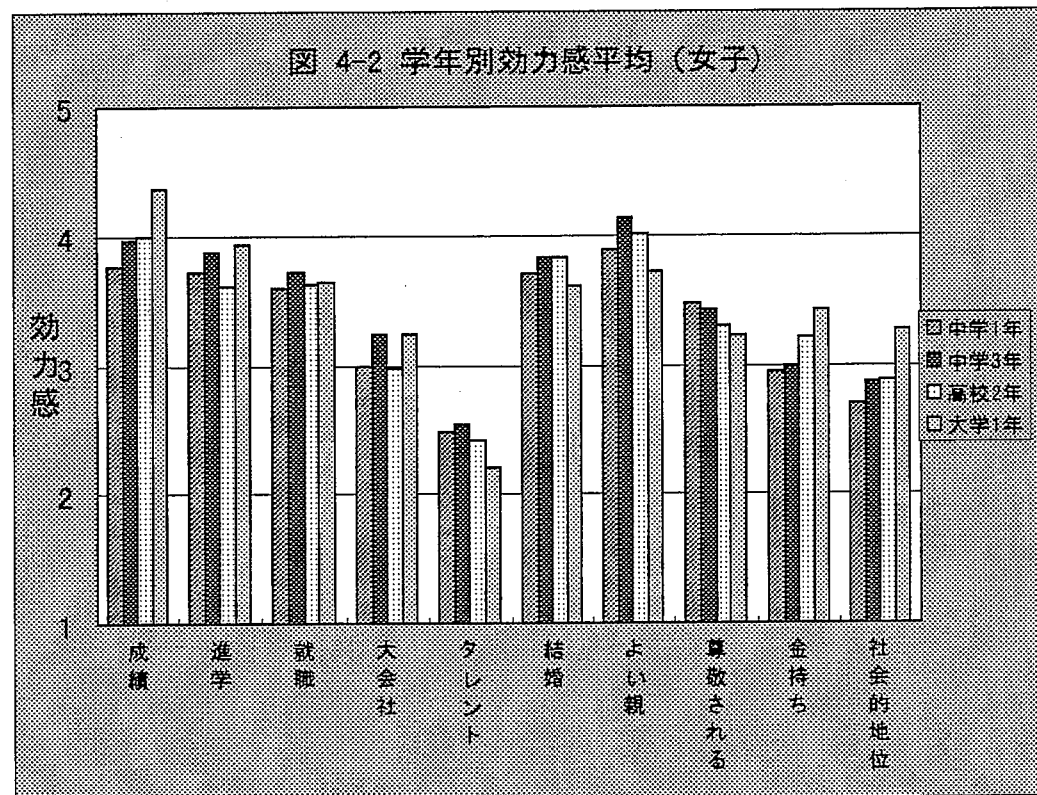
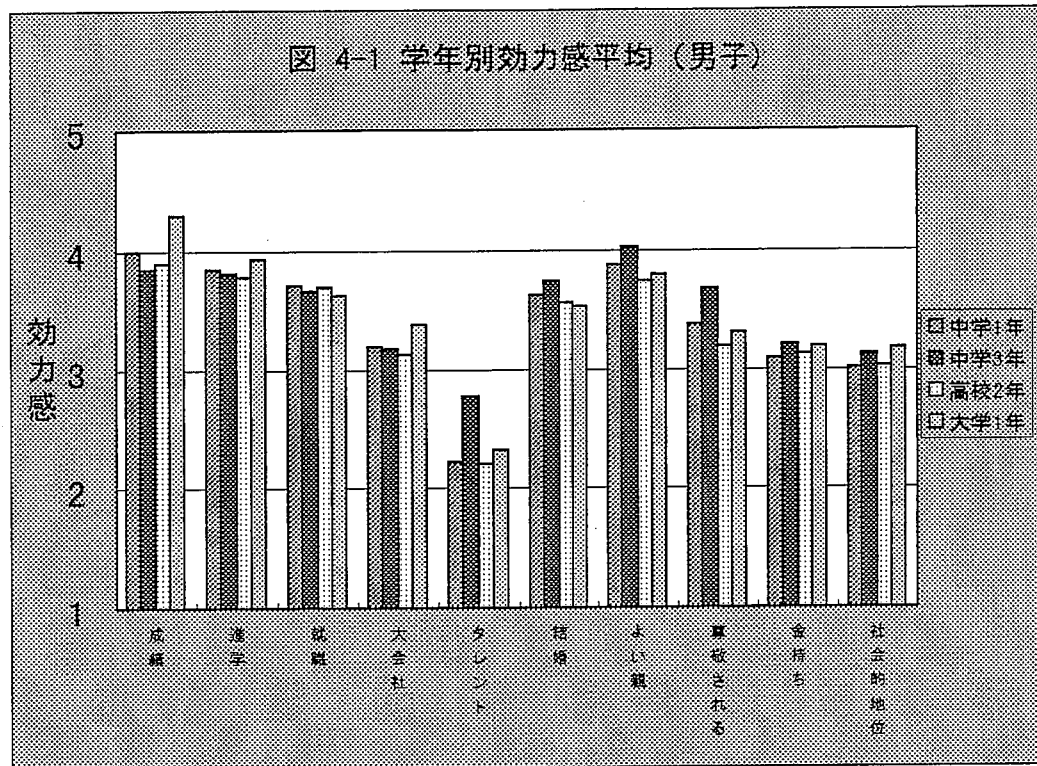
中学1年、3年、高校2年、大学1年の学年別に集計した平均値を、男子については図4-1に、女子については図4-2に示した。

全体的に顕著な性差は認められなかったので、男女を通して全体を概観すると、「どちらでもない」が3点であるので、「タレント」についてのみはっきり否定的であり、効力感が低いことがわかる。逆に男女ともに「成績」「進学」といった学業達成および「結婚」「よい親」といった家族の領域での成功については一般に高い効力感を持っている。「就職」および「尊敬される」といった社会的な関係が関与する問題に関しては、先のより個人的な事態には劣るものの、やはり肯定的な効力感を示している。「大会社」「金持ち」と「社会的地位」についてはちょうど中間で肯定的とも否定的とも言い難い。

次に学年による違いをみてみると、年齢が上がるとともに効力感が上昇するもの、中学3年あるいは高校2年といった途中の年齢群で効力感がもっとも高く全体として山形の傾向を示すもの、および変化のないものに、と大きく3分することができる。

年齢とともに効力感が増大する項目は、「学業」および「金持ち」「社会的地位」である。ただしこれらの項目において加齢による効力感の増大という傾向は女子においてはっきり一貫して認められる。一般に成長とともにさまざまな能力が増大し、実際の能力を反映して効力感が上昇するという方向性と、幼少の段階では実際の能力とは無関係に万能感的に高い効力感を持っていたものが、成長につれ現実に直面し、より現実的になることで効力感が低下するという方向性が考えられる。女子の「金持ち」や「社会的地位」に関しては前者の傾向が反映していると考えられる。男子ではこの傾向がはっきりしないことを考えあわせると、女子の場合に社会的な進出がより困難であることが推測されるが、成長とともにさまざまな女性の社会的活躍に触れ、こうした期待が高まっているのかもしれない。また「成績」においても同様女子では学年が上であるほど効力感が高いが、男子では大学生のみ高くなっていることを考えると、これは、大学進学率があがってきたとはいえ、大学生が同年齢層のなかで選抜された集団であることの反映ともいえよう。進学は男女込にして全体を見るとやはり効力感の上昇の傾向が見られるが、これは他の項目ほどはっきりしない。大学生が「進学」の結果大学生になっていることが結果に影響していると

考えられる。



「タレント」「結婚」「よい親」については山形の、つまり中学3年・高校2年で高く、大学生ではかえって低下する傾向が認められる。「結婚」「よい親」等に関しては、大学

生になって、中高生の時代よりはより現実味を帯びてくるにつれ、その困難さが実感され効力感が低下しているのかもしれない。また中学1年段階ではまだあまりに先の話であつてどうなるかわからない、実感として考えられないので中間的な値にとどまることによつて、3年の段階より低い水準にあると思われる。「タレント」に関しては、中学3年生がピークであるが、いわゆるアイドルタレントを考えると高校・大学生になると実際問題として年齢が高すぎるといふ事実も影響していよう。

「尊敬される」については男女で違いがあり、女子では一貫して年齢増加とともに効力感が低下している。このような一貫した下降傾向を示したのはこの項目のみである。「尊敬される」よりも「かわいらしい」ことが女性に期待されているのであるといった、女性的な特性に関して年齢があがるにつれより敏感になることが、このような下降傾向をもたらしているのかもしれない。後にみるように「尊敬される」ことの重要度も女子ではやはり年齢とともに下降しているが、この事実はこのような解釈と一致するものである。

最後に「就職」に関しては学年による違いはみられなかった。自分の希望した仕事につくことができるかどうかに関しては、一貫してある程度肯定的にとらえているといえる。

2. 将来の成功の重要度

効力感が現在のやる気を規定する上で重要だとしても、そもそも想定されている将来の成功が自分にとって重要でなければ、効力感の高低はあまり意味を持たないであろう。例えば全体的に見て「タレント」になることの効力感は低かったが、「タレント」になることは自分には無意味であり「タレント」になりたいと考えていないのであれば、その効力感が低いとしても問題とはならないであろう。

そこで、先に設定した将来の成功事態について、成功することの重要度についても尋ねた。まったく同一の10項目について、「あなたにとってどのくらい重要ですか」という問いを設定し、「とても重要」「かなり重要」「やや重要」「あまり重要でない」「まったく重要でない」の5段階の選択肢を設け、そこから一つを選択させる形で重要度に関する回答を求めた。

「とても重要」から「まったく重要でない」までの5段階の回答に対し、それぞれ5～1点を与えた。

学年別の平均値を、男子については図4-3に、女子については図4-4に示した。

まず全体的に見ると、「結婚」「よい親」および「就職」がもっとも重要視されている。